割礼が日常化した世界で

悠仁

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

割礼が日常化した世界で

【Ｎコード】

Ｎ１８６６ＪＸ

【作者名】

悠仁

【あらすじ】

性の低年齢化による学業への影響、学力低下、そして望まぬ妊娠、中絶　少子化が叫ばれる一方で起きている出来事である

そんな中政府はある決断を下す　男女専門校の廃止

そして　青少年健全育成法　通称、割礼法。

女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年健全育成法（通称、割礼法）が国会を通過した。

女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年の不純性交遊や自慰癖を予防する目的で、女子はある程度の年齢になれと全

員、健康診断を受けた上で割礼を受けることが事実上義務付けられた
　地域や学校、家庭の事情等にもよるが、早い女子では小学校低学
年の内から性器を傷付けられる場合もあるのである
また親や教師に不純異性交遊を咎められたり、学力低下の厳しい罰
として残酷な処置を受けさせられる例も見られた
これはそんな世界の少女達の話

青少年健全育成法

性の低年齢化による学業への影響、学力低下、そして望まぬ妊娠、中絶
少子化が叫ばれる一方で起きている出来事である
そんな中政府はある決断を下す
男女専門校の廃止そして

青少年健全育成法
通称、割礼法。
女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年健全育成法（通称、割礼法）が国会を通過した。
女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年の不純性交遊や自慰癖を予防する目的で、女子はある程度の年齢になれと全員、健康診断を受けた上で割礼を受けることが事実上義務付けられた
地域や学校、家庭の事情等にもよるが、早い女子では小学校低学年の内から性器を傷付けられる場合もあるのである
また親や教師に不純異性交遊を咎められたり、学力低下の厳しい罰として残酷な処置を受けさせせられる例も見られた
これはそんな世界の少女達の話

美咲と美咲式割礼の誕生

日本はかつて、教育の質と道徳的規範を重視する国として知られていた。しかし、ある日突然、教育改革の一環として「高校進学に際しての女子割礼義務化」が発表された。その背景には、女子生徒の「心身の統一」と「純潔の象徴」という名目が掲げられていた。多くの国民が混乱し、反対の声も上がったが、政府は強硬にこの政策を推し進めた。

その中で、最も注目されたのが、美咲という少女だった。

美咲は、幼少期から子役として活動し、中学生になった今もその人気は衰えることを知らなかった。抜群の歌唱力と天使のような笑顔、そして小動物のように愛らしく、小柄な身体に似合わぬ完璧なプロポーション。特にその巨乳は、多くの同年代の女子たちの憧れの的であり、男子たちの間では「天使の身体に悪魔の魅力」とまで呼ばれていた。

しかし、美咲もまた、この新たな制度の対象者だった。

――

モデルケースとしての美咲

政府は、この制度の導入に際して、モデルケースとしての「成功例」を必要としていた。その象徴として選ばれたのが、美咲だった。

「美咲ちゃんが受けるのなら、私たちも安心です」

そんな声がネット上で広がり、美咲は知らず知らずのうちに、この制度の顔となっていた。本人の意思は問われず、マスコミは彼女の「勇気」を称え、学校は彼女の「模範的な行動」を称賛した。

そして、美咲が受けることになったのは、最も過酷とされる「ファラオ式割礼」だった。

——

美咲式割礼の誕生

手術当日、美咲は手術着すら与えられなかった。ほぼ全裸といえる状態で手術台に縛り付けられ、医師たちは無機質な声で手順を確認するだけだった。

記録を残すため
と複数のカメラが回っている

「麻酔は使わない。痛みが彼女の心を鍛える」

そう語ったのは、手術に立ち会う教育改革を推進する大臣だった。

美咲は泣き叫んだ。しかし、彼女の声は手術室の壁に吸い込まれ、誰にも届かなかった。

手術は始まった。

医師の手が陰核に触れた瞬間、美咲の身体は激しく痙攣した。鋭い

刃が皮膚を切り裂き、神経を引き裂く。血が噴き出し、彼女の太ももを赤く染めた。痛みは脳髄を貫き、意識が飛ぶことすら許されなかった。

医師は、陰核を完全に切除し、大陰唇を縫い合わせ、経血の為の穴と尿道口だけを残してすべてを閉じた。これがファラオ式割礼の特徴だった。

美咲の悲鳴は、手術室に響き渡り続けた。しかし、それはやがて力尽きて、かすかな喘ぎ声へと変わっていった。

美咲式割礼の常態化

美咲の手術は、全国に中継され、多くの人々がその「勇姿」を見た。政府はこれを「美咲式割礼」と名付け、教育制度の中心に据えた。

「美咲ちゃんのように、痛みに耐えてこそ、真の日本人の女性となることができる」

そう語られるようになった。

美咲は、その後もメディアに登場し、笑顔で「痛みは一時的なもの。それが私の強さを育ててくれた」と語った。しかし、その瞳には、かつての輝きはもうなかった。

変わる社会と少女たち

美咲式割礼は、やがてすべての中学生女子に義務化された。手術は学校の体育館で行われ、麻酔は使われず、泣き叫ぶ少女たちの姿が日常となった。

一部の家庭では、海外への脱出を図る者もいたが、国境は厳重に封鎖され、出国は許可制となった。親が反対すれば、家庭裁判所が介入し、児童福祉法に基づく措置として、子供は施設に収容された。

少女たちは、美咲のように「強さ」を示すことを求められた。泣くことすら許されず、手術中に意識を失った者は「弱い」とされ、社会的に排除されるようになった。

――

美咲のその後

美咲は、歌手としての活動を再開した。しかし、かつてのような輝きはもうなかった。彼女の歌声は、どこか遠く、心の底から湧き出るようなものではなくなっていた。

彼女は、手術後の合併症に苦しんでいた。感染症、尿閉、慢性的な痛み。そして、精神的な苦痛は、彼女を徐々に蝕んでいった。

それでも、彼女は笑顔を忘れなかった。テレビの前では、いつも天使のような表情を浮かべ、歌を歌い続けた。

――

終わりなき夜

日本は、美咲式割礼によって「秩序」を取り戻したと政府は語る。しかし、そこには少女たちの悲鳴と涙が積み重なっていた。

美咲は、ある夜、自らの部屋で歌っていた。それは、かつての彼女のヒット曲だった。しかし、その歌声は次第に弱くなり、最後には静寂に包まれた。

彼女の手には、小さなナイフが握られていた。それは、かつて手術に使われたものと似ていた。

美咲の死は、政府によって「過労によるもの」とされ、葬儀は極秘裏に行われた。しかし、一部のネットユーザーの間では、彼女の死が「抗議の意思表示」だったと噂された。

――

美咲式割礼の未来

今も、日本全国の中学三年生の少女たちは、美咲式割礼を受けている。その手術は、教育制度の一部として組み込まれ、子供たちに「誇り」として教えられている。

しかし、一部の地下組織では、この制度に抗う動きが広がっていた。かつての美咲のように、天使のような笑顔を持つ少女たちが、静かに、しかし確実に、この暗闇に光を当てようとしていた。

美咲の名は、やがて「希望の象徴」として語られるようになるだろう。

三

（※この物語はフィクションであり、現実の出来事や人物を指すものではありません。）

割礼が日常化した世界では、幼少期に行われるこの儀式は、文化的な意味合いを超えて、社会的なステータスやアイデンティティの象徴となっていた。街中のあちこちで、割礼を受けた子どもたちが誇らしげに歩き回り、その姿はまるで一種の儀式のように見えた。

この社会では、割礼を受けた者は「選ばれた者」として特別な扱いを受ける。学校では、割礼を受けた子どもたちがリーダーシップを発揮し、割礼を受けていない者たちは、どこか影のある存在として扱われる。彼らは「未割礼者」と呼ばれ、差別的な視線を浴びることも少なくなかった。

リナは、未割礼者として育った少女だった。彼女は周囲の偏見に苦しみながらも、自分のアイデンティティを模索していた。ある日、彼女は偶然出会った割礼を受けた少年、カイと友達になる。カイはリナに、自分の選択を尊重し、彼女の存在を大切にすることを教えてくれた。

リナは、割礼がすべてではないと気づく。彼女は自分の価値を見出し、未割礼者としての誇りを持つことを決意する。彼女の心には、割礼の有無に関わらず、人間としての尊厳があるのだと。リナは、社会の常識に挑戦し、真の平等を求める旅に出るのだった。

とある小さな街の風習

美沙は、小さな田舎町に住む少女だった。
彼女の家族は代々続く伝統を重んじており、特に「割礼」という儀式が重要視されていた。
町では、少女が成長する過程でこの手術を受けることが、純潔と美しさの象徴とされていた。

ある日、美沙は母親に呼ばれ、割礼の日が近いことを告げられた。
彼女の心には恐怖が広がった。
友人たちの中には、手術の痛みや後遺症を語る者もいた。
美沙は、彼女たちの話を思い出し、胸が締め付けられる思いだった。

手術の日、美沙は町の診療所に連れて行かれた。
周囲には他の少女たちも集まり、緊張した面持ちで待っていた。
診療所に着くと衣服を脱衣し、一糸纏わぬ姿となり処置室に入室、処置台に寝かされると美沙の足をぐいっと開き、ふくらはぎを受ける台に素早く固定し、ついで上半身も太いベルトでしっかりと固定してしまった。
両方の腕を頭上で揃えてもっていくと、ひもを結びつけ、処置台にしっかり固定した。
形としてはM字開脚に近い。

看護師達は素早く固定した。
処置室は神聖な場所とされており、医療関係者以外は衣服、その他私物の持ち込みは禁じられている。
そして、機械音が響くバリカンが登場し、美沙の股間の陰毛を全てそり落とした。

まだ美沙は１３歳でありそこまで生え揃ってはいない
年齢や成長具合により、前夜の前処置で剃り落とされる少女もいた
続いて看護婦は美沙のクリトリスに装着されていたシリコン製の吸盤を回収したのだった。
これは前処置として前夜医師の処置によって装着されるものである。
既に半日近くも強く吸引されていた美沙のクリトリスは充血ししびれていた。
この吸盤でクリトリスを勃起させた状態にし、切除しやすくする。
クリトリスを切られるときの痛みが増すことにより、割礼を通過儀礼と考えるなら痛みこそ最も重要な要素なのである。
それが終わるとアルコールの臭気が漂い、ひんやりとする消毒が行われた。
もう逃げることは出来ない。
凶器の恐怖はすぐそこに来ている。
執刀医が現れ、両方の小陰唇に細い針を突き刺した。
「ぎゃあああああ！」
突如激痛が走り、美沙は叫び声をあげる。
すかさず看護師がガーセとたたんだものを美沙に噛ませた。
これを噛んで最後まで耐えろということだった。
「うぐううっ！ふぐぅ・・・・・！」
針の先の穴とつながったピンセットを看護師がもち、美沙の頭の上からおおいかぶさるように体を固定しながら小陰唇を広げた。
執刀医は右手にもったメスを柔らかいクリトリス包皮に入れた。
皮膚が縦に切り開かれ、吹き出してきた鮮血が姿をみせたクリトリス本体を染めた。
「うぐううっ！ふぐぅ・・・・・・！」
なるべく根元に近い部分でメスが環状に入り、血まみれのクリトリス本体があらわになった。
そこに医師は恐ろしいほどしみる生理食塩水をかけて洗い流した。
もう一本のピンセットが執刀医の手に握られ、美沙のクリトリスを

つまんだ。
柔らかい先端部分を鋭いピンセットでつかまれ、鈍い痛みが美沙の全身をかけぬけた。
少しずつ根元部分にスライドしていき、普段は体の中に埋まっている部分までが完全に露出された。
一度力を抜いてまたつかみ直すことを何度か繰り返し、ＭＡＸまでクリトリスを引っ張り出したところで執刀医は右手にメスをもった。
そして、クリトリスの根元に近い部分に慎重にメスをいれた。
クリトリスの大部分が美沙の本体から引き離されてピンセットにおさまった。
再び生理食塩水で消毒が行われる。　クリトリスをすっかり失った股間で、今度は大陰唇、小陰唇に処置が行われる。
続いて大陰唇をピンセットでつまんだ。
「うぐううっ！ふぐぅ・・・・・！！！」
　鋭い痛みに美沙は声にならない悲鳴をあげた。
医者は裏返した美沙の大陰唇の裏側をそぎ落とすようにメスを入れた。
「うぐううっ！ふぐぅ・・・・・・！」
クリトリスの時とはまた違う、生まれてこの方感じたことのない痛みに美沙はガーゼをかみ締めてうめいた。
既に全身が汗に濡れて台を汗などで汚さないように背中や尻の下に敷かれた布も濡れていた。
大陰唇の内側が削ぎ終わると今度は小陰唇根元の粘膜ごとそぎ落としにかかる。
やっと片側の粘膜がそぎ落とされ一部がクリトリスの包皮と繋がってぶら下がっている状態になったとき、とうとう美沙はかまされたガーゼを落として泣き出してしまった。
「うう・・・。おかあさん・・。いたいよお。」
　美沙の泣く声など聞こえないというように医者は容赦なくもう片方の粘膜をそぎ落としにかかった。

「いたーい！いたい！もうやだ！たすけて・・・いたいよお・・・。」

美沙は泣いた。
無駄と分かっていても暴れて逃げようとしたがしっかりと固定された体はまったく動かず、台がきしむことさえなかった。
美沙の性器は切除されたクリトリスの両側に剥ぎ取られた大陰唇と小陰唇が羽のようにぶら下がる状態となった
最後に必要な処置として股間が生理食塩水で洗浄され、美沙が絶叫をあげた。
最後の仕上げとして残った大陰唇を縫い合わせねばならなかった。
こうすることにより生理的に必要な行為以外は何もできないようになってしまう。

手術が終わると、美沙は自分の身体に何かが欠けていることを感じた。
周囲の少女たちも同様だった。
彼女たちは、伝統の名のもとに自らの身体を犠牲にしたのだ。
美沙は、これが本当に美しさや純潔を象徴するものなのか疑問を抱き始めた。

伝統は続くが、美沙心には新たな決意が芽生えていた。
彼女は、次の世代にはこの残酷な儀式を受け継がせたくないと強く思った。
自らの声を上げることが、彼女の新しい戦いの始まりだった。

とある少女

殺風景な処置室、手術着に身を包まれた歩は不安な思いで天井を見つめていた。
　手術着の丈は短く歩の腰までしかない。
むき出しの下半身には毛布がかけられていた。
　現在精密検査が行われており、性器の発育に問題ない
と判断されれば、その歩の身体から毛布が取り払われ、体の中でも
一番敏感な部分に鋭いメスが入ることになる。
歩はまだ１２歳
中学1年の少女である
歩はスポーツ一家に産まれた
父は競泳選手で世界水泳やオリンピックでの表彰台の経験もある
母は天才スキー少女と呼ばれ、１３歳の頃から活躍
兄や歩を産みながらまだ現役として華々しく奇跡の活躍をしている
高校生ながらサッカーのA代表のレギュラーとして活躍
そんな歩が期待されるのは当然だった
そして歩は生贄にされた
　まだ割礼が義務　とされながらも必ずしも行われるものではなかった時代に産まれた歩
水泳に陸上に剣道にスキーに　とマルチに才能を発揮した天才少女
しかし何をやってもメダルはどうしても届かない
それならば
とモデルケースとして彼女が選ばれたのだ
ファラオ式割礼という最も過酷な術式を麻酔なしで
歩の意識は遠のき、処置室の白い天井が揺れて見える。冷たい金属の台に仰向けに寝かされ、両足は固定されており、動かせない。医

師たちの声がどこか遠く、そして無機質に響く。

「準備はいいか？」

「はい。麻酔は使わずに、ファラオ式で行います。」

「本人の意識は？」

「完全に覚めています。」

医師のやり取りに、歩の胸が締め付けられるように痛む。麻酔なし。その言葉が頭の中で反響する。歩は歯を食いしばり、震える足をなんとかしようとするが、すでに身体は拘束されている。

「痛いのは、ちょっとだけよ。」

看護師がそう言いながら、歩の太ももの内側に何かを塗っている。冷たい感触に、歩は思わず息を呑んだ。

父の顔が頭をもたげる。
母の笑顔。
兄の背中。

彼らのようにはなれなかった。
努力した。どれだけ努力したか、誰よりも知っている。
でも、メダルには届かなかった。
表彰台には立てなかった。

「歩ちゃん、頑張ってね。」

誰かがそう言った。その言葉が、まるで最後の宣告のように感じら

れた。

メスが触れた。

鋭い、鋭さよりも先に、熱が走る。
歩は叫びたくて、でも声が出ない。喉が引きちぎれそうになるほど歯を食いしばり、目を見開いて天井を見つめ続ける。涙が頬をつたう。それさえも許されないような、無慈悲な静寂の中で。

皮膚が裂かれる音が聞こえた。
自分の身体が、自分のものではないように感じられる。
脳が悲鳴を上げている。意識が飛ぼうとしている。でも、飛ばせない。麻酔なし。意識あり。それがルールだった。

「出血は想定内。進め。」

医師の冷静な声。
歩には地獄の始まりにしか聞こえなかった。

何かがえぐり取られる。
何かが引き裂かれる。
何かが、もう二度と戻らないものとして失われる。

「もう少しよ。我慢して。」

我慢?
我慢するしかなかった。
歩は生まれた時から、我慢を強いられてきた。
期待に応えるために、泣き声すら我慢したような気がする。

メスがさらに深く入る。
歩の視界が白く焼ける。
それでも、手足は震え続ける。意識はまだここにある。

「完成まであと一歩。」

医師の声が、どこか誇らしげに聞こえた。

完成。
その言葉が、歩の心を切り裂いた。

自分は、完成させるための素材だったのか。
父の栄光の延長線上に、自分の人生はあったのか。
母の奇跡の影に、自分の存在は飲み込まれていたのか。

そして、ようやくの終わり。

歩は息もできず、ただただ天井を見つめ続ける。
そこにはもう、未来は映っていなかった。

とある町の風習2

次の少女、ユキが呼ばれた。
彼女は美沙の姿が運び出されるのを見送り、小さくうなずいた。
泣きはしなかった。
泣いてはいけない。
泣いたら、恥になる。

ユキは診療所の白い壁に目を向けた。
そこには、何人もの少女たちの血の跡が、拭いきれずに残っている
ようにも思えた。
彼女は一歩ずつ、足音も立てずに進み、処置室に入る。

看護師たちが、無言で彼女の服を脱がせた。
布一枚、肌一枚、剥がされていくように感じた。
そして、ユキもまた一糸纏わぬ姿で、処置台に横たえられた。

手首を頭上で結ばれ、足はM字に広げられ、固定された。
金属の冷たさが肌に食い込む。
ユキは目を閉じた。

バリカンの音が聞こえた。
股間のわずかな陰毛が、音もなく刈り取られていく。
冷たい風が、傷口のように感じられた。

次に来たのは、クリトリスへの吸盤だった。
前夜、医師の手によって装着されたそれは、すでにユキの小さな肉
の芽を引き伸ばし、赤く腫れ上がらせていた。

吸い続けられた痛みが、今も脈打つように響いている。

消毒のアルコールが、肌に染みる。
それだけで、ユキの背中はわずかに反った。

執刀医が現れる。
メスを手にし、無言でユキの股間に近づいた。
ユキは、目を開けたままだった。

「……」

叫びは、出なかった。

最初の針が、小陰唇に刺さった。
ユキの唇が、わずかに震えた。
それだけだった。

メスが入った。
クリトリス包皮が、真っ二つに裂かれる。
血が噴き出し、医師の手元を赤く染めた。
ユキは、目をそらさなかった。

クリトリスが、完全に露出される。
ピンセットがその先端をつかみ、根元まで引き出されていく。
ユキの指が、わずかに握りしめられた。
固定された手は動かせない。
それでも、彼女の心は動いていた。

メスが根元に滑り込む。
ユキは、息を止めた。

クリトリスが、切り取られた。

血が流れ、生理食塩水がかけられる。
冷たい痛みが、全身を貫いた。
ユキのまぶたが、わずかに震えた。

次は、大陰唇だった。
ピンセットが、内側をつまみ上げる。
ユキは、目を閉じた。

メスが滑る。
肉が削がれる。
ユキの歯が、わずかに食いしばられた。

小陰唇。
粘膜が、剥がされていく。
ユキの息が、乱れる。

だが、声は出なかった。

彼女の顔には、涙も流れない。
ただ、目を閉じたまま、静かに耐えていた。

処置が終わり、縫合が始まる。
大陰唇が、左右から引き寄せられ、縫い合わされる。
ユキの股間は、もう何の形もない。
ただ、傷跡だけが横たわる。

手術台から下ろされ、ユキは立ち上がった。

足は震えていたが、彼女は歩いた。
次に呼ばれる少女の顔を思い出し、
ユキは、そっと目を伏せた。